

「第5回 学習基本調査」と現場の視点から考える

# 主体的な

# 学習者の姿と

# その育成のあり方

2016年1月、ベネッセ教育総合研究所より「第5回 学習基本調査」の結果が公表された。

第1回の調査から回を重ねるごとに減少していた高校生の家庭学習時間が、今回初めて増加に転じ、さらには、学習態度や教科に対する意識も軒並み改善している。

この結果の背景にあるものは何か。そして、今求められている「主体的な学習者」を育成するために、学校や教師はどのような役割を果たしていけばよいのか。現場の実態も踏まえながら、考えていく。

## Q. 最近の生徒の学習状況から、課題と感じられている点を具体的に教えてください。

◎学習習慣や学力に大きな格差が出てきており、全く学習しない層の存在に危機感を抱いている。学問の面白さ、学問が必要な理由などの発信を強める必要がある。(北海道)

◎学習量に大きな変化はないと思うが、ノートの取り方、弱点の補い方、自分に合った学習方法の工夫、志望校の現状分析などの力が弱くなったと強く感じている。ただ問題を解くのではなく、どうすれば同じ間違いを繰り返さないかを考えて学習している生徒が少な過ぎることが残念でならない。(茨城県)

◎受け身の状況は変わっていないと思う。しかし、場が与えられれば生徒は自らやれる可能性をどの層も潜在的に持っている。場の設定と指導方法の問題に尽きるのではないか。(埼玉県)

◎学習だけでなく、部活動や生徒会行事など様々な場面で、教師の介入が増え、生徒の主体性を奪っている。結果的に「学校は与えられる場所」という雰囲気が醸成される。(富山県)

◎以前に比べて真面目に取り組む生徒が少し増えたと感じているが、主体的かと言えばそうではない。これは、真面目であり、裏を返せば自由度が少ないことの弊害だろう。アクティブ・ラーニングの導入が叫ばれる理由は、まさにこれだと感じる。(愛知県)

◎丁寧過ぎる指導も問題ではないか。時間がかかっても、自立的な学習者を育てるための工夫を根気強く行う必要がある。(岡山県)

◎「学習の意義」をうまく伝えられていない。課題発見型学習ではないが、与えられる学習からの転換が不可欠だと感じている。(愛媛県)

出典／「VIEW21」高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは、2015年12月にウェブとファクスで実施。

本号のテーマ

「第5回 学習基本調査」の結果と現場の実態から  
生徒に育むべき力とその指導のあり方を考える

「第5回 学習基本調査」の結果概要

現状把握【P.4~7】

- ◎各学校段階において、家庭学習時間が増加。その大きな要因の1つが、宿題の時間の増加
- ◎家庭学習に主体的な学習態度で臨む児童・生徒の割合が増加
- ◎教科の好き嫌いでは、どの学校段階においても、ほとんどの教科で「好き」の割合が増加
- ◎「分かりやすい授業」を望む声が減少した一方で、中学・高校では依然として「上手な勉強の仕方が分からない」の割合が高い
- ◎全ての学校段階で、授業における能動的な学習活動を「好き」と答える割合が増加。ただし、「先生が黒板を使いながら教える授業」などの従来型の授業を好む割合は依然として高い

学校教育のこれまでの改革、取り組みによって、生徒の主体性が向上

生徒の主体性をさらに育み、「主体的な学習者」へと導くために、  
教師に求められる指導、役割とは？

教育の連続性を踏まえた  
「主体的な学習者」の育成のあり方を考える

座談会【P.8~13】



「唯一解ではなく、最適解を追い求める学びを」  
青山学院大学 教授 榎田大二郎

「分かったふりをせず、『分からない』と言える子どもを育てたい」  
東京都足立区立千寿小学校 校長 田村正弘



「教師が手をかけ過ぎなければ、生徒は自分で考える」  
高松第一高校（香川県高松市立）進路指導主事 片山浩司

「苦勞を乗り越える体験を通して育つ力、自信、意欲が大事」  
埼玉県鴻巣市立吹上中学校 校長 加藤幸弘



「外部のリソースも活用し、生徒が成長のきっかけを得られる場をつくる」  
福島県立福島東高校 進路指導主事 千葉 聡

高校における実践事例

実践事例 1

大阪府立箕面高校 【P.14~17】  
生徒・教師がオープンマインドで語り合う土壌を英語を軸につくる

実践事例 2

岡山県立岡山芳泉高校 【P.18~21】  
全校体制で言語活動を取り入れ、分かる、深まる楽しさを引き出す